

翻 訳

「経済学教育の急進的な改革」 （“A Radical Reformation of Economics Education”）

ジャック・リアルドン (Jack Reardon)

訳：松 本 朗

【訳者解題】

本稿は、Maria Alejandro Madi と Jack Reardon の編集による The Economics Curriculum: Towards a radical reformulation, 2014, WEA Books の第12章, Jack Reardon による “A radical reformation of economics education” の邦訳である。本論文の特徴を記す前に、こうしたテキストが出版された、そして、それを出版した組織 (World Economics Association) が現れてきた背景を述べておきたい。

2001年のフランスでの経済学を学ぶ学生達が、新古典派経済学を軸とした教科書化された(制度化された)経済学教育に対する批判的運動を開始した。この呼びかけは、「ポスト自閉的経済学ネットワーク」(the Post-Autistic Economics Network) へとつながり、最終的には「世界経済学協会」(the World Economics Association) へと発展(2011年5月16日設立, ホームページ: <https://www.worldeconomicsassociation.org/>) する。その協会の機関誌は Real-World Economics Review (『現実世界にたつ経済学』) であり、関連する学術誌として International Journal of Pluralism and Economics Education, (『多元主義と経済学教育の国際誌』) が発刊された(2009年第1巻発行, ホームページ: <http://www.inderscience.com/info/inissues.php?jcode=ijpee#issue>)。

さらに、同じ2011年には学生主導の経済学再構想化 (reconceptualize economics) 運動が起こる—経済学の再考 (Rethinking Economics)—。この運動は、6大陸の30以上の国の学生グループの統括組織 (umbrella organization) として展開されている (ホームページ: <http://www.rethinkeconomics.org/>)。

一方、ややさかのぼってみると、1969年、当時ケンブリッジ大学大学院生であったヒュウゴ・ラデイス (Hugo Radice) によって出されたチラシに端を発し、異端派による新古典派批判を軸とする経済学教育運動が展開された。このチラシ配布は、1970年1月にロンドンで開かれた研究大会につながり、さらに英国の異端派経済学を発展させる重要な機関である社会経済学研究大会がうまれる。その後、この大会の機関紙 Bulletin of the Conference of Social Economists (社会経済学大会年報) が発刊され、1976年には Capital and Class (『資本と階級』) へと移行された。その後、欧米では多くの異端派経済学学会が生まれてくる (例えば, Union of Radical Political Economics, International Post Keynesian Conference etc.)。

こうした運動の特徴を一言で言えば、単一的な体系によらない多元主義的、複眼的な経済学体系の構築と現実経済の分析を求めていくところにあるだろう。この視点からいえば、経済学には

必ずしも数学的モデル構築力は必要なく、現実経済への鋭い問題意識こそが求められる。

本稿が入った著書もこうした視点から新古典派経済学教育を批判し、新たなカリキュラム体系の構築を狙いとするものであり、本稿はそのまとめ的位置づけの章である。この運動がおかれている背景もあり、本稿の内容はやや先鋭的、感情的な面もないとはいえない。また、提案されたカリキュラムの実現性や妥当性についても検討が必要であることは否定できない。しかしながら、制度化され、教科書化された経済学への疑問が提起されてからかなりの時間がたつ中で、ここで紹介したような運動が提起している提案や指摘は、経済学教育に携わるわれわれにとって一定の示唆を与えてくれるものとする。この翻訳が今後の議論に資することを期待したい。

1. はじめに

アルフレッド・マーシャルは、『経済学原理』第8版において、「経済条件は常に変化しており、個々の世代は自らの問題を自らのやり方で見つめなければならない」(Marshall, 1920 [1946]: v)と書いた。私たちの時代は、気候変動、地球規模での金融危機、所得と富の明白な格差、医療危機を含む多くの問題に取り囲まれている。これらの問題は、相互に強められ、ただ悪化して行くだけであろう。しかしながらその中心には、人類の苦境への思慮深い議論を放棄するような経済学それ自体の体系と経済教育がある。それが、私たちを取り巻く問題の相互関係をわかりにくくし、学生たちを人類の苦しみに慣れこにしている。

今日まで、新古典派パラダイムの中での経済学教育の改革への要求は熱意が失せた状態で、周辺部ばかりを下手に修繕することに甘んじており、より多くの発言も取り上げられてこなかった。近現代史において最悪の不況の一つが続いているにもかかわらず、そして新古典派経済学がその不況を予測し、理解することが総合的にできなかったにもかかわらず、「中流階層と一緒に、主流派の普遍性が地盤を無くす兆候はない、ましてや譲歩の必要性を感じることもない」(Fullback, 2010: 94)。この危機は「経済学で教えられていた方法や経済研究の方向に何ら決定的な影響を与えるようには思えない」(Otsch and Kapeller, 2010: 22)。「これまで以上に同じこと」が圧倒的に強調されている。

ベストセラー経済学教科書のなかの一冊の著者であるグレゴリー・マンキューこそ良い事例である。彼は、金融危機が深刻化する中で次のように書いている。「私たちはいまなお、経済生活問題、貿易の利益、需要と供給、市場の効率性等を教えなければならない。これらは、入門課程の本業であり続けている」(Mankiw, 2009)。しかし、「私たちがただ微調整しか必要ないと仮定することは、狼藉の限りを尽くすほどの傲慢である」(Reardon, 2010: 182)。

誠実に再評価することを邪魔しようとする新古典派経済学の何が悪いのか？ どこに新古典派経済学の謙虚さはあるのか？ 新古典派経済学のどの点が不快なのか？ どんな場合に、大学教授や教科書執筆者、出版社は、罪や過ちを認めるのか？ 新古典派経済学にはふり出しに戻ってやり直そうとする気持ちがあるのか？ 私たちの経済が途方もなく変化しているにもかかわらず、「…21世紀初頭の学生は、どのように企業が価格付けしているかについて、19世紀末の教員が行った講義とほとんど同じ講義を受け続けており、[そして] 19世紀のどの科学者も、彼の [ママ]

学体系のなかで今日常識になっていることにまごついているであろう」というようなショックを公衆が受けている。これは、どうした事態だ? 「経済学者を救え」(Keen, 2011: 168-169)。

「内的な原因で大きな惨状を生み出す爆発をした原子力発電所を管理していたチームを率いてきた技術者がつくれた、原子力技術者のためのテキストを大学が使い続けているとしたら、公衆の抗議を受けるであろう」(Fullbrook, 2009: 22)ということを考えてみよう。あるいは、ほとんどの専門家(や教科書)がその伝染病が起こる可能性を入念に否定しながら、医療専門家が気づかないうちにその病氣、すなわち伝染病にかかり、発症したことを想像してみよう。公衆の抗議をまねかないだろうか? 専門家に責任を求める怒りの要求がうまれないだろうか?

なぜ、このような同じような状況が、経済学では大目に見られるのか? このように間違っただけの政策を教え続ける経済学者の権利を剥奪する公衆の努力は、なぜ存在しないのか? このような学位を与える大学を閉じる努力が何故存在しないのか? 経済学の課程で何が教えられ、経済学教科書で何が書かれているのかを確かめる、詳細な公的ヒアリングは存在しないのか?

教科書に何が欠け、何が間違っているかを詳細に述べた、経済学の学生のために書かれた本を想像してごらん。その結果、学生たちは、「無意識にイデオロギーを受け入れることから自らを守るために、教科書から何を読み取るかについて批判的に考え始めることができる」(Hill and Myatt, 2010: 2)。

このような本が書かれていたことを、不幸にも私たちは想像してはいけないのだ(Hill and Myatt, 2010)。その本のタイトル *The Economics Anti-Textbook-A Critical Thinker's Guide to Microeconomics*. London: Zed Books (『対抗する経済学教科書—ミクロ経済学を疑問に思っている人へのガイド』)は、実際にこの問題を強調している。学生は複雑な材料を学ぶ時に助けになるガイドのような本ではなくて、そのテキストに何が書かれているかを忘れる本が必要である¹⁾。

いくつかの理由から新古典派経済学が総じて改革に失敗し、誠実な再評価も頑なに拒んでいることが説明できる。一つは、気持ちよく古いやり方でもの事を進めることに熱中しながら、その一方で、受け入れてきたやり方を邪魔するかもしれない新たなことを、不合理にも感情的に非難しようとする人々や学会の性癖(それが本来的なものなのかそうでないのか判らないが…)。確かに、フランシス・ベーコンはほぼ4世紀前に次のように記している。

「学者に家を与え、学ぶ機会を醸成しようと仕向けている、学校、大学、短大、同様の機関の風俗や習慣は、どんなことも科学進歩に有害であるように見受けられる…。というのも、読書も、人の著書も、ある著者の著書に限定され閉じ込められる。それらに同意していない人はどの人も、騒ぎを起こす人とか革命家としてすぐに攻撃される」(Bacon, 1620 [2000], Book I, XC: 75-76)。

二つ目、これは一つ目と極めて関連しているが、自分の仕事がむだであったことを認めたくないという後ろ向きの気持ちが存在する。皮肉なことに、合理性を主張する学体系にとって、地位の確立した専門家が、新たなパラダイムに賛同して生涯信じてきたことを放棄することは難しい。さらに悲しいことだが、彼らの教育のもつ近視眼的で、原理主義的な限界が、多くの代案を理解するのを妨げている。それは、新古典派経済学を「むしろコペルニクスやブラーエ、ガリレオ以前の天文学のような科学以前」(Keen, 2011: 158)の状態にする、「正反対の事実証明、あるいは理論的批判のいずれかに直面して、その中心的な信念を抱え込(む)非合理的な固執である」

(Keen, 2011: 168)。

三つめ、新古典派経済学の基本的機関：大学、学部、学会、学会誌、分類システム、101*の経済学教科書やその基本的な語りの部分が、総合的かつ双方向で意義のある改革へのあらゆる努力を阻止している (Fullbrook, 2010: 95)。フルブロックは、「このように非妥協的で、克服できない状態は、機関として独立に造られているにもかかわらず、それらが相互に絡み合い、相互決定される性質にある」と記している (Fullbrook, 2010: 95)。

(訳者注) *基礎, 基本, 初級講座, 初級編◆大学の基礎的な入門講義のこと。

四つ目、上記の諸要因のそれぞれを結びつけ、自らの権利において重要なものが、経済学教育である。その経済学教育こそ、私見では、新古典派経済学が近年の危機を予測できなかったのはなぜか、他のパラダイムを無視するのはなぜか、そして、失敗した政策に頑固にしがみつこうとするのはなぜか、そして異端者を阻害し批判するのはなぜか、を良く説明している。確かに、「実際に構成され、行われている経済学 (そして経済学教育) は、[われわれの] 諸問題への理解に反対する最も有効な防御として機能している」(Schmacher, 1989: 50)。そしてキーンも記しているように、

「…経済学者は、将来経済学に起こるあらゆる停滞に対抗する手段の導入を阻止している主要な力であるかもしれない。公衆が経済学に全く反対の効果を及ぼしてほしいと期待する権利を持っているのに、経済学は、現代の不況をより深刻でより長く、手に負えなくするかもしれないのだ」(Keen, 2011: 1)。

私たちには、私たちの問題を糺してくれる手助けになる経済学や、経済学者が必要であるが、しかし、もっと重要なことは、現実世界にたつ、教育された (そして変節されていない) 経済学者 (Real World Economist) が必要である。そして、教育よりも転向を主張する経済学や経済学教育、多元主義よりも一元論である教育、そして、人間行動の無数の多様性を理解できずに、また理解したくない学生や、同時代の問題を解決しようとする他の社会学者と一緒に研究できない学生とを生み出す教育を私たちは必要としていない。²⁾

2. 経済教育に伴う諸問題

私の学生が最近の試験で書いていることである。「私は数年前に二つの経済学の科目を受けました。だが、経済学の研究と企業および社会全体との関係を見つけることができなかった」。経済学の包括的な目的が経済の研究であると仮定してみよう (そうではなかったっけ?)。経済は企業と個人で構成されていると仮定してみよう。そうするとこの [感想は] 抑制されている批判だろうか?

これがまったくごく少数の意見であるとすれば、横暴な態度でこの意見を捨て去ることもできたであろう。しかし、私は何度もこのような意見を聞いた。学生が私に、経済学を興奮して始めたが、自分たちが住んでいる世界とは似ても似つかない推論的な論理と抽象モデルによって飽き飽きさせられたと語ったとき、私の心は止まった。なるほど、「企業、政府、その他非学問的な

世界では、経済学が技術的で純化した学体系という見方が広がり、成長する、すなわち、[現実との] 関連性が疑わしく、実際の使用では限界があるとの見方が広がるのである」(Hodgson, 2001: 9)。

物理学者が、自らの講義は物理世界とは何の関係もないと語ったと想像してみよう。あるいは、解剖学の教授が、自らの講義は人間の体とは何の関係もないと語った想像してごらん。怒りが生まれるだろう：(それとも) 失敗を謙虚に告白し、教授法を改めることに専念するという望みが生まれるのか。

「経済学はテーマで規定されるのではなく、思考法で規定される」(Coyile, 2007: 231-232) と主張する新古典派経済学にとっては、そうではない。学生たちが教科書を開き、現に生活し働く(であろう) 経済を学ぶことを経済学に期待するときに、経済学は、欲求が無限のなかでの希少資源について取り組んでいるのであり、その点を理解するために抽象的な生産可能曲線を使って描写している、とだけしか述べないのでは、どおりで学生たちは不満をもち当惑することになるのである。

新古典派の教授法における問題は、あまりにも数学的なところにあるわけではない—実を言えば全く反対である。新古典派が、間違った問題—最適化—を学習するために間違った数学(単純な微積分)を使っていることである。そして、さらに悪いことに、それが悪い数学であるのは一ゆがめられた数学であり、数学の限界を理解していないからある(Keen, 2011: 402-411)。数学は、特に自然法則をはっきりとさせることができる。「自然の探求は、数学を使って物理学的に終わるとき、最高の成功を収める」(Bacon, 1620 [2000]. Book II, VIII: 108)。

新古典派経済学もそれほど複雑ではない：私は、経済学へと切り替えた先の物理専門家と同様に、新古典派経済学が見かけによらず単純であることが判った。そして、これはケインズがリカード主義者の完全な勝利について書いたのと同じ主張である。

「経済学が、指導を受けていない通常の人々が期待することとは全く異なった結論に達していることで、経済学は知的な名声を…増した。実践へと移されるそうした経済学の教えが厳格であり、しばしば受け入れがたいものであることは、経済学に美德を与えた。巨大で、一貫した論理的上部構造を持ち続けるように経済学が改造されたことは、経済学に美しさを与えた」(Keynes, 1936: 33)。

新古典派教授法には三つの問題がある。

第一、主題として教えているものと、世界がどのように動いているのかとの間に関連性がないこと。ケンブリッジ大学の経済学の大学院生であるヒュウゴ・ラディス(Hugo Radice)が1969年に出されたチラシに目を配ってみよう³⁾。経済学を研究し、あるいは教えている私たちの多くは、この世界の激しい社会経済問題に直面したとき、私たちのテーマの多くが不適切で意味のないものになっている、と感じる。大体、経済学は、現存の資本主義制度を当然の前提と考え、その制度がより効率的に機能することだけに関心を持っているか、あるいは全体的には不十分でしかない限界的調整を行うことにのみに関心をもっている。さらに、経済問題が同時に社会的、政治的問題であることが避けられないことを、経済学は執拗に否定してきた(Leeの引用2009: 127)。

簡単に言うと、新古典派経済学は私たちが暮らしている世界を映し出す、有効なモデルを構築できてこなかったのである。その一方で、「批判的な考えは、自由な市場環境における人間の利

己的な行動がいかにか社会進歩を導くかという典拠の怪しいストーリーに道を空けるために脇に追いやられたのである」(Magnuson, 2012: 13)。実際の産業で実際の企業がどのように操業しているのかを学生に教えるよりも、むしろ学生に「強制的に」(Fullbook, 2009: 随所に見られる)、科学を憎悪する基本的公理が正しいものであると受け入れさせている (Fullbook, 2009)。

その時、学生たちは、「それぞれの経済モデルを展開するのに必要な勇気ある仮定に適合させるために、教科書の著者の机ででっち上げられた擬制的な価値」(Otsch and Kappeller 2010: 17)を使って、理想的な産業の仮想企業を分析するためにこれら公理を使うように求められる。

第二に、社会科学と自然科学、特に物理学と数学をかたくなに無視すること。

「他の科学において、カオス理論、複雑性分析、それらと近親関係にある進化論は、重大な影響力を持ってきた。それらが示していることは、経済学が、これら無視した見方が広がることができた20世紀後半から21世紀初頭の科学の主流からいかにして孤立してきたかである」(Keen, 2012: 410)。

第三に、新古典派の教授法は、反多元主義である。さまざまな理論的、実証的なアプローチを多面的に重視することによって、私たちの問題の複雑さを学生たちは捉えることができるのに、新古典派経済学は、学生たちに一まるですべての経済学者が同じように考えているかのような一経済学者のように考え、そしてただ唯一の見方が存在し、その一方で他のすべての合理性を否定することを教え込む。このことは、一部では、「資本主義と経済学との間の近親相関関係」(Dowd, 2004: xiii) のためであり、それによって新古典派経済学は「財界と資本主義のためのイデオロギー上の弁護者になった」(Lee, 2009: 49)。

それだから、確立した異端派や保守的な範囲を越える思想を批判する人はだれでも、「騒ぎを起こす人であり、革命家」として簡単に攻撃され、いじめられ、中傷され、ブラックリストに載せられ、傷つく。多くの事例の中でもとりわけの事例として、ジョン・ケネス・ガルブレイスへのダイアン・コイルの激しい非難を取り上げてみよう。多くの経済学者が、ガルブレイスは我が流派の士(経済学者の一人)ではないと思う理由は、彼の方法論にある。ガルブレイスの研究は、経済学の領域をカバーしている…しかし、彼の研究は社会学や歴史学を使っている。…経済学者の多くはガルブレイスを受け入れていない。というのも彼はモデルを使わなかったからだ(Coyle, 2007: 232)。にもかかわらず、それでもガルブレイスはアメリカ経済学会の会長であり、⁴⁾経済がどのように動いているかを明快な文章で説明している数多くの著作をもっている。

そして、言うまでも無く、モデル作成の構想力は、主要な新古典派学術誌への論文掲載のために教えられ、我慢し、受け入れられることである。受け入れられた教義に挑戦し、制作モデルの代案を展開する経済学者は、排斥される。Lee が次のように書いている。

「[異端派] は、研究を代表していないのではなく、異端派たちは、(主流派経済学者におなじみの言葉を使う) 反経済学者であり、そのような研究や研究者は同業者からは一掃されなければならない経済学の敵でもある」(Lee, 2009: 175-176)。

この意味で、新古典派の教授法は、「正統派への追従の本当の保護者として現れる偏狭な熱狂者」(Bruce, 2008: 100) として特徴付けられる原理主義と違いはない。もし私たちが大学で原理主義に寛容ではないのであれば、新古典派経済学になぜ我慢しなければならないのか？

私たちは、改宗させるさせるというより簡単な(しかしながら、倫理的には問題がある)目標に代

わって、学生たちを教育するという高尚な目標を捨て去ってきた。

3. 解 決 法

私は、1831年に『Liberator (解放者)』の発行を始め、奴隷という不快な不正を禁止するまでそれを続けると宣言したウィリアム・ロイド・ガリソンに鼓舞された。我々の世代も、緊迫した環境上の現実を無視する時代遅れの非現実的な新古典派の奴隷とされており、弁護者に慣れ、我が世代の多くの問題が気にならなくなっている。ケインズがリカード主義の勝利に書いたように、「それが、多くの社会的な不公正を説明し、進化の体系における必然的な事態として明白な残酷な行為を説明できたこと、そして、全体としてあり得そうなこうした事柄を変化させる試みが良きことというよりも悪しきことをなしていると説明できたことによって、それは権力に勧められた」(Keynes 1936: 33)。経済学教育の再構築と再構想化は、われわれのもっとも重要な仕事である。

『International Journal of Pluralism and Economics Education (多元主義と経済教育の国際誌)』の創立編集者として私は、当然のことではあるが、多元主義をいたる所にある解決法として十分に支持する⁵⁾。対照的に、私は、多元主義が経済学教育の再構想化のための必要条件だが十分条件ではないと感じている。

多元主義にはさまざまな定義が存在する(これは驚くことか?)が、その本質を伝える簡単な定義は、「いろいろな見方が競い合うことの妥当性にたいして相互に敬意を払うこと」である。おそらく、多元主義にさまざまに定義がある一つの理由は、その定義がいくつかのレベル—存在論、認識論、方法論、教授法—の上に存在しているからである(Negru, 2009)。

多元主義は、次の理由で必要である(十分ではないのだが)。第一、多元主義は、活気と確信を確実にする。というのも、「思考は、性質と同様に、多様性とその発展の燃料である。多元主義と多様性が喪失したとき、技術革新と発展は休止へむかって速度を落とすだろう…。多元主義は技術革新と科学進歩に必要である」(Hodgson, 1999: 13, 斜体は原文で強調されている)。多様性は競争を与え、思考の世界での競争は経済学を発展させるのに必要であり、もし「経済学が、思考という市場で完全競争を刺激しながら、純粋に多元性があるならば」(van Staveren, 2011: 123)、その時にこそ競争は経済学を発展させることができる。それと対照的なのが一元主義であり、広く行き渡っている新古典派経済学は、通説派へのいかなる侵略に対しても防衛しようとする原理主義的な熱狂を伴う一元主義である。リーによれば、「新古典派経済学の『耐えられない、反多元主義』の態度、やり口が『知的偏狭』へと墮落してきており、その偏狭によって学問体系は新古典派経済学を超える経済理論に気づかなくなった(Lee, 2009: 48)。

第二に、多元主義だけが民主主義と一致しており、思考の民主主義だけが大学の思考と一致している。すなわち「知的多様性、自由な研究、そして、原則的に挑戦に対して開放的でない、人道的に受け入れられる真実は無いという原理は、大学の中心的な目的の達成のために絶対に必要なものである」(Lee, 2009: 185)。そして、したがって、

「知的派閥争いは、真実と賢明さを独占し、その独占を維持し強めるために国家と組織力

(例えば、研究および試験のための基金への管理やあるいは大学予算への管理)を利用する。そして、人類すべての知識の解決されていない性質を否定し、未解決の疑問への多様なアプローチを拒否する。こうした知的派閥争いは大学の考えや性質と一致しない」(Lee, 2010: 185-186)。

第三に、多元主義によって学生たちはさまざまな見方に触れるようになる。「したがって、それらの相対的な利点を議論し、競い合っている理論の弱点や強みについての知識を展開することができる」(Ostch and Kapeela, 2010: 23)。多元主義が思考の民主主義や民主主義社会と合致しているばかりでなく、民主主義的な相互作用が、経済学を前に進める助けになる「変革の対話」へと導くことができる (Soderbaum and Brown, 2011)。

第四に、多元主義は有益である。というのも、

「パラダイムあるいは理論的な見方が普遍的に適応できると主張することはできない。いいかえれば、あらゆる種類の問題に対して有効であることはない。それぞれのパラダイムあるいは理論的な見方は提起するに値するものを持っているのだろうし、ある理論的な見方が別の見方に対して選択されるのは、…部分的にはイデオロギーの問題である」(Soderbaum, 2008: 10)。

言い換えれば、「社会科学的研究において価値やイデオロギーが存在する」ことを所与とすると、「…理論的な見方あるいは理論研究の間に補い合う関係、すなわちそれぞれが独自のイデオロギー的な見方を反映していることが適切である」(Soderbaum, 2008: 41)。というのも、「現代生活の複雑性を研究するために、政治学、経済学、心理学、そしてその他の社会科学体系がすべて一緒に用いられないのであれば」、私たちは、「現代社会をより十分に理解できない」からである (Bowles et al., 2005: 51)。

五つ目に、多元主義は学生目線の学習を高めていく。考え抜かれた疑問を問う能力を育てることが強化される。多元主義は、分析的でグローバルな見方を獲得し評価する学生の能力を促していく。このアプローチに固有の前提は、学生たちに問いかけ探求する権利を与えることであり、経済現象がいつまでも続く探求の対象であるということである (Davis and Emami, 2009)。

六つ目に、多元主義だけが経済学に情熱を植え付けることができる。そして情熱は、「取り除くことのできる不公正を見極める」(Sen, 2009: vii) のに必要である。次に、情熱が求められるのは、私たちに、われわれ世代の問題解決を促す知的勇気を与えてくれるからである。ジョーン・ロビンソンが強く勧めていたように、「独立した経済学者は、人類の立場から自由に意見を述べ続けなければならない」(1980: xii)。加えて、私たちは、恥ずかしいことに、他の社会科学ではとっくに昔に放棄された実証科学というイデオロギー的な口実に隠れていたのではないか。いまなお19世紀に執着している新古典派経済学は、学生たちを「取り除くことのできる不公正」を甘受させ続けながら、入念に情熱を根絶させてきた。

そして最後に、経済学が改革されることによって、もし世界がより良い場になるように促されるのであれば、—そうでなければならないが—、経済学は正義を意識しなければならない、そしてそうすれば、多元主義的な対話によって多くの段階で相互交流することになる。というのも、「対話やコミュニケーションは、正義の主題の一部であるばかりでなく…、それら自身に求められているさまざまな理論の性質や強さと範囲は、議論と論壇からの貢献に依存している」(Sen, 2009: 88-89) からである。

経済学に情熱を傾けるためには、不正を認識できることが求められており、次には、権力を理解し、どのように制度が展開しているかを理解することが求められる。そして、さらに、虚心坦懐に、そして他の学問体系から大いに学ぶ姿勢が求められる。情熱と正義は一元論—新古典派経済学の現在のやり方、特に教授法の水準—にはふさわしくない。⁶⁾

既に述べてきた長所があるにもかかわらず、二つの理由から多元主義は、経済学教育の改革に必要なだが、十分な要素ではない。第一に、フルブロックが記しているように、

「多元主義は、その精神と認識の両方において極めて重要である。しかし、それが経済学者の間ではどんなに強固のものであっても、新古典派経済学の支配を打ち砕くほどの十分な基盤を持たないだろう。このことは、新古典派経済学以外の、そして、主に異端派経済学が受け入れる根本的な経済思想の新たな結合を求めている。そして、さらに重要なことは、彼らのメンバーが、異端派経済学者たちが現実にも新古典派のアイデアを使って行っているように、ある特定の学派の思想に関係しようとする実践の形で果たす新たな結合を求めている」(Fullbrook, 2010: 101)。

第二に、多元主義は一般に一方通行路にある。すなわち、「異端派経済学者は喜んで多元主義に関わる [けれども]、主流派経済学者は一般的にやりとりをすることをしない」(Lee, 2009: 283, 注#26)。新古典派経済学者が多元主義者だと主張し、おそらくは方法論レベルではごく限られた程度でそうであっても (Coyle, 2007: 239-254)、その他のレベルではそうでは無いことは確かである。そして、そのことが、新古典派経済学者の「いじめおこない、甘言を弄し、排外し、けなすなどなどの」(Lee, 2009, 随所に) 原理主義と心に抱く信念にしがみついた「不合理な固執」とを説明する。

こうした非協力的な態度を所与とすると、現実世界にたつ経済学者 (Real World Economist) は三つの選択肢を持つことになる。一つは、何もせずに、新古典派経済学を支配させ、すべての市民の知的な営みに影響させ続けることである。しかし、フレッド・リーが強調し述べているように、「何もしないことは選択肢ではない」(Lee, 2009: 206)。同時に、現実世界にたつ経済学者による一致した行動を提起しつつ、「経済学が自宅を改築すると信じることはできない」(Keen, 2011: 23-4)。

第三に、強固な協議と活気に満ちた現実世界に立つ経済学の研究集団を発展させ続ける一方で、新古典派経済学とのあらゆる対話の試みを放棄する。フレッド・リーは、強固な協議を確立するために行うべきことを叙述している。

「異端派経済学はもっと多くの学生を教えなければ [ならない]、そしてもっと多くの博士課程の学生を生み出さなければならない。さらに、異端派経済学者は、多様な異端派学会に参加し、多様な異端派学術誌に寄稿し、そして他の異端派経済学者と開かれた多様な理論的対話に関わりつつ、もっと専門的にかつ理論的に従事するようにしなければならない。そして、研究アセスメント演習 (the research assessment exercise) や研究テーマの基準書 (the subject benchmark statement) そして学術誌と学科の主流派ランキングに挑戦 [しなければならない]」(Lee, 2009: 206)。

第四に、ほとんど排他的に西洋的な思考を行い、19世紀の科学的方法へと自己陶醉する新古典派経済学の頑迷な理解の仕方を積極的に減らすために—新古典派経済学の反多元主義的特徴を

所与とした場合には、矛盾するような一対話に関わる必要は必ずしも無いが、その一方で、世界経済学連合 (World Economics Association) の明白な目標はそこにある (Fullbrook, 2010)。

第五に、現実世界にたつ経済学の頑強な課題を構築し、現在の諸制度の支配力を弱める効き目を否定するわけではないが、新古典派教育を正面から改革することもまた重要である。もし私たちがそれをしなければ、新古典派は、いじめや排除、軽蔑や信用を傷つけることを続けるだろう。そしてそうしている間に、国家権力を使い彼らの支配力を強固にして、公共政策を支配し影響し、さらには、知的エリートの集団を汚染する。その一方で、私たちは二流市民へと退けられ、我々の研究課題が、いかに活気があり強固であっても無視される。

新古典派経済学とその教授法の再構想化を私たちの課題に付け加えるべきことは、現実の世界にたつ経済学や、経済学一般、学生たち、そしてこの惑星のより良き将来にとっての最良の関心事である。私たち自身の研究プログラムを構築することで満足してしまうことは、ゾラが『The Belly of Paris (パリのベリー)』の中でシャーベットにオウム返しに、「階級の利害は暴政のもっとも強力な同盟の一つである」(2007: 139) と言わせたように、自滅的である。言い換えれば、いらぬお世話だというのは一文字通り、現状が続くことを白紙委任することであり、それによって「支配的エリートは論壇の支配を続けることができる」(Leech, 2012: 96) ののである。このように、私の見解では、新古典派経済学—教育—における多元主義の欠如の起源を攻撃することは最上位に位置する。

私たちは特定の解決策を主張する前に、疑問を提起することがおそらく重要である。それは、現実世界にたつ経済学のように、私たちはあれこれのやり方で新古典派経済学を教え続けなければならぬのだろうか？ そうするように求めるいくつかの理由が通常存在する。一つは、もし私たちが新古典派経済学を変えようとするならば、新古典派経済学を理解しなければならない。二つ目に、新古典派経済学は、良かれ悪しかれ、共通語であり、だから私たちはそれを理解しなければならない。三つ目に、新古典派経済学は、しばしば、政策が組み立てられる基礎になっている。四つ目に、新古典派経済学の知識はその学体系を少しずつ削ることができるし、多元主義的な対話を確立するための通関港になることができる。五つ目に、新古典派経済学に触れることは、多角的な見方を理解するために必要である。

私はこれまでの議論で (新古典派経済学を学ぶ一記者) 利点を見てきたけれども、新古典派経済学を教え続けなければならないとする同僚には、失礼ながら、同意することはできない。私は、失敗した時代遅れの考えに執着する科学を他に知らない。それというのも、特に「新古典派経済学は実際に経済に取りかかっているわけではない。だから、例えば市場のような制度構造の分析に、新古典派経済学はどのように有益になりえるのだろうか」(Hodgson, 1999: 44)。

キーンも次のように書いている。

「新古典派経済学は、経済的賢者の源泉になることができず、実際には、どのように現実的に経済が動いているか—そしてなぜ、周期的にそれは厳しく崩壊するのか—を理解するための最も大きな障害であった。もし私たちが、経済を実際に叙述する経済理論を常に持つことができていたとしたら、私たちが経済の崩壊をどうにかしていたということは言うまでもなく、新古典派経済学は衰弱するに違いない」(Keen, 2011: 15)。

学問体系は変化するはずである。つまり、他の同業者たちは、なぜこの要素を教え続けなければ

ばならないと感じる理由はないはずである。なぜなら、おそらく、それは思想史の教科課程でも、あるいは論理学の教科課程でもそうだし、あるいは、多角的な見方を導入する教科課程の一部としてもそうだ。だが唯一の見方を導入する教科課程は決してそうではない。そして経済の教科課程も異なる。なぜなら、「新古典派理論は…実際の市場の動きを示していない」(Otsch and Kapeller, 2010: 21) からである。

通説を急進的に打ち破るときである。

「古い事柄に新たな事柄を重ね植え付けることによる諸科学の大きな進歩を期待することはむなし。不十分なほとんど取るに足りない結果しか伴わないように常に円周を回り続けることに人が満足できないとすれば、新たな始まりはもっとも低位の基礎から起こらなければならない」(Bacon, 1620 [2000])。

新古典派経済学を教え続ける機会費用は、あまりにも高すぎる。特に、私たちが、今の世代の問題の解決を促すための十分な知識を発展させなければならないときはそうである。なぜなら、今の世代の問題の解決策は、社会的に提供される教科課程 (Lee, 2009: 8) に、何はともあれ真っ先に関心を持つ、強固な現実世界にたつ経済学の研究課題からしか生まれてこないからである。逆に、新古典派経済学を教え続けることに本意ながらも黙って従うことの機会費用は高すぎる。

しかし、多元主義を気取ると、新古典派経済学は、とくにこの論文の初めの方で言及した美德という観点から、必要で無くなるのであろうか？ 答えはもちろんそうだ。しかしそれは、新古典派経済学が多元主義と相互交流し、それを実行できるときに初めてそう言える一現状のままではそれは不可能だ。このように、私たちの最終目標は新古典派経済学の再構想化であり、したがって、その実行者はもはや議論にかたくなにならず、議論を認めることに不満を言わず、代案を受け入れる。その時初めて、「新古典派プロジェクトの普遍的な思考」(Fullbrook, 2010) が起こりえるのである。語るは、行うことよりも易し！ そして、ウィリアム・ロイド・ガリソン (William Lloyd Garrison) のように、私たちは、長い間その戦いの中にいる。にもかかわらず、これは必要かつ重要な戦いである。

しかし、どのように虚心坦懐に学ぶことを、また広く受け入れながら学ぶことを教えるべきか？ このような問いが発せられなければならないことは、経済学教育の悲しい状況への証言でもある。私は、これが問題になっているような他の学問体系を知らない。多くの注意が個別の課程で「どのようになすべきか」、カリキュラムの設計を「どのように再設計すべきか」に向けられてきたが、その一方で、この論文の残りの部分では、見落とされてきた問題に焦点を当てよう。つまり、経済学が論争的な性質を持つものであり (Lee, 2010, 随所に)、新古典派経済学がかなりイデオロギー的な内容を持ち、反多元主義的なものであることを所与とすると、不可欠な課程の組み合わせが、経済学のカリキュラムに組み込まれる必要がある⁷⁾。その組み合わせとは、新古典派経済学の弊への多方面からの合同した挑戦の必要性に合致しているものである。その必要性は、次に、学生や大学の役員、公衆を含む巨大な玄関港を求めている (Reardon, 2004)。不可欠な組み合わせを提起することは、入門以降の課程において避けられない新古典派の猛攻撃に抵抗 (望むべくは回避) できるように、学生たちの目標にすることである。このように、この提起は、内部から新古典派の体系を取り除くことであろう。

ヒルとマイアットは、「あなたの教授への71の質問」という教科書を浴びせることによって、

下から「革命の火を焚くことを促したい」(2010: 2)と望んでいる。多くの教授が大学の講義で意見交換し、学生から学ぶ機会を楽しんでいる一方で、これらの質問は思慮に富んだ質問を学生たちに浴びせるよりも遙かに先へ行ってしまっている。それらの質問が、新古典派経済学の教授が自らの体系を知らないことを、新古典派に代わる理論を理解できないことを、そして矛盾する事実を故意に無視していることを示そうと意図しているからである。ヒルとマイアットの本が書かれたことは、第一に、この問題の深刻さを示している。

それだから、新古典派の教授が、すべての消費者は合理的であることを仮定するように学生たちを脅すとき、そして、その市場が抑制されていなければ、すべてのために利益をもたらす均衡点に達すると教科書が主張するとき、スポンジのようにその主張を吸収するのではなく、自らのために考え、自分自身の思考を展開し、学生たちは彼らの教授たちに挑戦するようになる。⁸⁾

4. 経済学の専攻に必要なものを確立する

オッシュとクーパーは、「経済制度に関するいくつかの関連する学情報 (some context knowledge) (経済史とは何か? 制度はどこから発生したのか? 経済と社会の関係はどのようなものか?) を学生たちに提供するために、経済史や社会学, 政治経済学, 哲学などの関連分野を課程に追加する」(Otsch and Kapeller, 2010: 23) ことによって経済カリキュラム改革をしようと提案している。多元主義が学科レベルで採用されることがいったん決まれば、教職員がカリキュラムを展開するために実際に活動しなければならなくなる。その次には、完全で根本的なオーバーホールが必要な先端的なバージョンが出てくるが、それは、多くの学科では受け入れがたいであろう。それでも、漸次的な改革を実行することは可能である。

最初に議論すべき問題は、前提として必要な課程の組み合わせが学生にも教員にも保証されるかどうか? 学生も教員もプログラムへ正しく飛び込むことをどのくらい想定できるかである。その第二段階で、経済学を専攻する学生たちが実際の学習を始める前に重要なことは、すべての学生たちのためにまず必要とされる組み合わせを工夫することである。前提として必要なことを提供するための目標となるのは、その後の課程で必ず現れる新古典派イデオロギーの猛襲に、学生たちが抵抗 (望むべきは、はぐらかすことが) できるようにすることであり、多元主義が盛んになるような実り豊かな基礎を提供できることである。さらに私たちが前提として必要なことは、経済学教育が根本的にいかに傷を負っているかを証明することである。

大学カリキュラムの別のところで学ばれている多元主義が、経済学専攻にとって十分であるということを想定するだけでよいだろうか? ジョン・シーグフリードは、あらゆる大学の中にある、新古典派経済学が典型的に強調する (演繹法を含む) アルゴリズム的な思考法が、一口で言えば供給品であると主張している。このように経済学科は、少なくとも新古典派の経済学科は、必要とされるかなりの供給品を増加させる (Siegfried, 2009: 219)。以下で議論する履修前提科目によって、学生自身はアルゴリズム的な知識の有効性について判断することが助けられる。私は、そのような教科課程について多くのことを考えてきた。次に示すのは、私が提案していることの要約である。

a. 世界的な文学：人間の状態の多様性については、フィクションよりも良い入門読本はない。正しく教えられるならば、フィクションは、あれこれのどんな学問体系と同じくらいに、いやそれ以上に、無数の形態の行動や人類の窮地を説明できる。ヨハン・ゲーテの作品「若きウェルテルの悩み」の主人公が述べているように、「世界の物事は、二者択一のあるいは下の方への結論になることはない。そして起こりえる行為の過程も感情も、鍵状の鼻から冷たくあしらうような鼻まであらゆる領域にわたる種類の鼻があるのと同じように、無限に多様である」(Goethe, 1774 [1989]: 58)。そして、あらゆる人は合理的であるというかなりの根拠無き主張をはぐらかすために、ここではふたたびゲーテのウェルテルの悩みを出そう。「人間は、単に人に過ぎない。いったん感情が荒れ狂い、人間性という領域が彼を取り囲めば、人が合理的感覚をわずかでも持っているということは、ほとんど意味をもたない」(Goethe, 1774 [1989]: 64)。サミュエル・ジョンソンの「幸福の探求—アビシニアの王子ラセラスの物語—」に出てくる

「現在にそれほど多くを費やす気持ちは無い。回想と予想が私達の今のほとんどすべてを満たしている。私たちの感情は、喜びと絶望であり、愛と憎しみであり、希望と恐れである。喜びと絶望という過去は客体であり、希望と恐れという未来も、愛や憎しみですら過去を尊重する。というのも、原因は結果の前に起こってきたはずだからである」(Johnson, 1759 [1976])。

フィクションは、さらに効果的に不正義を叙述することができし、最も強力に行動を呼び起こすことができる。そして、ゾラのジェルミナールやアプトン・シンクレアのジャングルほどに良い例は無い。もし経済学の目標が供給過程を理解し、世界がより良い場になることを促すことであるとすれば、フィクションや多元主義は当然の同盟者である。センが書いているように、「私達は自発的に反応し、非人間的な行為が起こったときにはいつでも抵抗できるようにならなければならない。もしそれが起こったら、道徳的な想像力を発達させ鍛えるような個々人の、そして社会の機会が広げられなければならない」(Sen, 2005: 278)。フィクションが明らかに歴史では無い一方で、頻繁に、適切な叙述や注意深い対話が、私たちの心の中でどの歴史的な叙述よりもより多く喚起され、ずっと長く突き刺さってきた。そして、ディケンズの二都物語の、私にとってのもっとも強力な印象の一つは、フランス革命が始まるや、デファージュ婦人が死刑囚の名前を用心深く編んだことである。このことは、いかなる歴史的な物語よりもずっと良く、長く抑圧された小作農の辛抱強い復讐を捉えている。

これは、どのタイプのフィクション—詩なのか、小説なのか、ドラマなのか—が最も良い作品かを、そしてどの作品も最高であるということを論議する場では無い。むしろ、前もって用意されなければならないことは、将来の脅しやいじめに対する必要な防波堤であり、フィクションはもっとも適切なものであるという議論をすることである。

カリキュラムに経済思想史を復権させることの必要性が多く書かれている (Dow, 2009) が、ここで議論されている前提として必要なカリキュラムによって、生徒たちにはそのような重要な課程が十分に用意される。

b. 資本主義制度の歴史—経済学の専攻にとっては、現在の資本主義制度がどのように発展してきたか、政府の役割、そして、適切な制度を構築することによって人々が現代の諸問題にどのよ

うに反応するかを理解することが重要である。資本主義にも、いかなる経済制度についても必然的なものなどない。真空の歴史から学習する新古典派経済学は、たとえ政府の介入がほとんど無くなっても、資本主義は理想的に資源を配分できることを証明しようとするだろう。

資本主義制度の歴史の課程では、より良い世界を構築するために必要な制度と共に、どのように、なぜ資本主義が発達してきたかを、誰が損をし、誰が得するかを議論するだろう。

「概念と事例を与えることによって歴史は、それが現代世界についての思考へと向かうとき役に立つ。それは、疑問を作り上げることを手助けし、良い疑問無しに、全く一貫した方法で考え始めることはできない。歴史の知識は、どのような種類の情報がこれらの疑問に答えるのに必要なのかということを示唆してくれる」(MacMillan, 2008: 167)。

c. 知的な思想の歴史—知的思想史の課程では、思想がある問題に反応してどのように展開したかを明らかにする。そして学生たちは、どのように、なぜ新古典派経済学理論が発展したかを理解するだろう。そして、リベラルアーツの伝統の中では、歴史は多元性と自然にむすびつくものである。「歴史によって、私達は、複雑な世界を理解することが助けられる。しかし、事柄を見つめる可能性があるのは唯一の方法であるとか、唯一の行動過程しかないとか仮定することの危険性への挑戦でもある」(MacMillan, 2008: 168)。それでは、思想の知的発展の課程よりも、大学での学びを刺激的するもっと良い入門とはなんだろうか？

サミュエル・ジョンソンの『アビニシア王子、ラッセラスの歴史』の中で詩人イムラックが述べているように、

「人間の心の展開や、徐々に改善されていく原因、科学の絶えざる進歩や、考える人たちの光であり陰、つまり学習していることと無知なることの移り変わり、芸術の死滅と再生、そして知的世界のすべての革命に関連する歴史ほど、全般に有用な歴史の部分はない」(ジョンソン, 1759 [1976]: 104-105)

d. 量子物理学—CD やコンピュータ, MRI や交通信号のように、今日の経済活動における多くの装飾具は、量子物理学の知的成果の産物である。そればかりか、テストや実験を喜んで行う科学的な姿勢や、もしも必要であれば理論の改革への道を開く事例は、量子物理学よりもすぐれたものはない。加えて「量子物理学の勃興は、…科学者が思考する時の物理的な現実性が課してくる修正主義の傑出した事例である」(Polkinghorne, 2002: 85)。なぜなら、「実験は性質と物事それ自体について評価を与える一方で、あらゆる性質に対する解釈が真理であるとされるチャンスの獲得が、諸事例と適切な実験とでなされる」(Bacon, 1620 [2000], Book I, L: 45) からである。このことを、新古典派経済学の惨めな記録 (Keen, 2011: 随所に) や「驚くことにほとんど実証に裏付けられていないか、実証に乏しいものや、不都合な全く反対の事実を(悪いことに)無視することによって、仮説や政策的処方箋をしばしば示している」(Hill and Myatt, 2010: 6) 経済学の教科書と比べてみよう。

ヒッグス粒子の発見ほどに、いかに物理学が科学として進歩してきたかを示す良い事例は無い。物理学体系の勝利の中で、エコノミスト誌は次のように記している。それは、歴史上もっとも成功した科学的理論の一つのこの上の無い業績であった。確かに、それは、その理論の破滅の始ま

りでもあり、もっと良い理論に取って代わられる始まりでもある。科学においては、真実への絶えざる研究によって、そのことがほめたたえられるものになる (The Economist, 2012)。

e. 哲学—導入課程では、おそらく倫理学に焦点を当てると共に、多元的な内容と人間理解というはかない行為によって思想を議論しようとする哲学の伝統を適切に展開する。ベーコンが記しているように、「人類自体が持つ特定の性質から人類を理解することは、理解しようとする事物の中にあるより大きな秩序や規則性を積極的に示唆することである。そして、本来、独特で相違に充ち満ちている多くの物事が存在しているにもかかわらず、そうした理解の過程では、並列的な、存在しない関係を作り出してしまう」(Bacon, 1620 [2000], Book I XLV: 42)。

経済学の中には倫理的な標準が必要であるという合意が存在している (DeMartino, 2010) が、その一方で、新古典派経済学の今日の学生たちは、市場は正しくその決定をするのだから、市場は正しく資源を配分しているだけでなく、倫理にたいする何の心配もいらぬとも教わっている。例えば、人気のマネジリアル・エコノミクスの教科書が、経営の最も重要な教訓は、「低い価値で使われている資産を確認し続け、利潤を生むより価値のある資産へと低い価値の資産を移していく方法を考案し続ける」(Freob and McCann, 2010: 16) ことであると主張していることを考えてみよう。しかし、価値は何を意味し、私達は価値をどのように概念化し得るのだろうか？ 私たちが使っているのは誰の見方(考え方)なのか？ どのような倫理的な基準によって、私たちは、どの資産を動かし、どのように動かすべきかについての決断を促されているのだろうか？ 哲学はさらに、「経済学の教科書の中にしばしば現れながら、めったに議論されない、効率や合理性、選択、自由」(Fullbrook, 2009: 19) のような故意に曖昧にされた言葉に、意味を与える手助けになり得る。

5. 必要科目への意義

この要請(初期の必修科目—訳者注)には二つの意義が存在する。第一に、これらの科目は、経済学専攻の学生に提供される科目数を抑制するだろう。しかし、経済学教育は労役では無いのである—それは学生たちを教育していることでは無い。だから、もし最終結果の一つが伝統的な科目数の削減であるか、既存の科目の内容の削減であるのかどちらかになるのであれば、それならそれでよい。その上、示唆されているこれら必要科目は大学教育の基礎であり、すべての社会学者と共に知的に転換できる、(訓練されているというよりも)よく良く教育された経済学者を生み出すであろう。その上、このような必要科目によって、学生たちは、後の新古典派科目のなかでの避けられないイデオロギー上の猛攻撃を受け流すことができるのであろう。

第二に、誰がこのような科目を教えるのか？ もちろん、新古典派経済学者ではだめだ—彼らは、これまで述べてきたような科目設定の要請が長期的に計画されている戦略の一部であり、一組であるに違いないことを強調するからだ。

これら必要科目があまりにも少ないのではないかとか、十分ではないのではないかとか、さらに、その必要科目が正しいものであるかどうかという論争はできる。けれども、基本的なポイン

トは、多元主義が有効になるために、改訂される経済学をどのように教えるべきか。将来の教育者が、それを教育されなければならないだけでなく、学生たちに多元主義を受け入れるように準備させなければならない点である。そして、このプログラムの進む前途では避けて通れないイデオロギー的な猛攻撃をかわす知的な準備も、学生たちにさせなければならない。伝統的なマクロ/マイクロの科目から直接に始めるとことは、間違った処方箋である。もちろん、主な障害は、必修科目へ払われるこのような配慮のために学部がさらに徹底的な教育課程を提供できなくなることである。

教育課程の正確な結果を描き出す義務がある。すべての課程が多元主義の展開の形で共有されることが必要なわけでは無く、この課程が全体にわたって統合され、伝統的なサイロが消えることが肝要なことであることを繰り返しておきたい。さらに、私たちは、行き先はわかっているものの、そこに至るもっとも効果的な方法についてもっと意見交換し、熟考しなければならない革新的な小道にいることを忘れてはならないのである。

金融危機の観点から、カリキュラムを改変するための多くの対話がおこなわれてきたが、その一方で、入門マクロ/マイクロ経済学の伝統的な課程とそれに続くのが中級マクロ課程、その次には、最適問題を理解するために重量級のカリキュラムを持つ統計学、すなわちエコノメトリクスが来る。そしてそれに続くのが、貿易や開発、労働、金融経済学のように周辺部ばかりをいじくり回すところに強調が置かれた、そのまま残っている伝統的な上級課程である。結局これらは、新古典派経済学の典型である。

「最も多くの応用分野の課程で教えなければならない本質は、同じであり、特定の問題や主題の制度的な内容は一顧だにされない…。経済学者は経済学の基本原則—機会費用、限界分析、シグナルとしての価格の役割、インセンティブ、特化、意図せざる結果—を、[その課程に]注意を払わずに教える。これらの概念は、応用分野の課程が要素市場に焦点を当てていても、生産市場に焦点を当てても同じである」(Seigfried, 2009: 219)。

もし 経済学がもう一度有用なものになるとしたら、経済学は我々世代の諸問題を明らかにするに違いないし、積極的にそれら問題の解決に資するようなカリキュラムを仕立てるに違いない。私は、—1年ごとに—主要なテーマに沿ったカリキュラム改訂することを提案する。もちろん、これらテーマは主観的であり、見かけ上でも決定的なものではない。私の意見では、我が世代の最も大きな問題は、(1)貧困であり、現存の経済システムが基本的な財やサービスを個人に供給できないこと、(2)債権と債務の負担を圧縮し、弱めること、(3)迫りつつある環境の大破壊。これら問題は、明らかに、もはや変えられないものではなく、もしも経済学が再び有用なものなることができたなら、再度デザインされる経済学のカリキュラムによって、学生たちが最終的にそれらを解決できるものであるはずである。

私は、次のようなテーマにしたがって4年間それぞれの教科課程の経済学のカリキュラムを再構成することを求めている。ある年には、個々の基本ユニットが1単位から4単位の範囲で提供されなければならない。私の目的は、単に示唆的なものにすぎない。望むべくは、読者の手助けを受け、提案される特定のコースの中身が新しくなっていくことである。さらに、これらは、総合的なテーマであり、企業のような特定の経済主体への特殊分析と相互関連している。消費者は需要として統合できる。

6. 提案の説明

6.1 1年目：もっぱら必修に専念する：経済学の課程は取らない

6.2 2年目：社会経済学（Political Economy）、貨幣信用

6.2.1 五つの基本ユニット

基本ユニット1：経済学入門：パート1。経済学とは何か。政治経済学とは何か、この体系はどのように展開してきたか。経済学はそのほかの社会科学とどのように関連しているか。（提案：1単位）

基本ユニット2：経済学内部の様々な考え方（思想）。特別な3単位の基本ユニットを提案する。このユニットでは、4年間使うことになるそれぞれの思想—マルクス主義、古典派、ポスト・ケインズ派、オーストリア学派、フェミニスト等々の特性を描き出す。この基本ユニットは、それぞれの学体系を使う教員によるチームでの講義になろう。強調されなければならないのは、結節点である—いったん学生たちがある見方を学んだ後で、その学生たちはどのようにその他の見方に関係し、変化していくのか。類似性と違いとは何か？これは、他の見方を無視し、かつては正しかったものを間違っているものと見なす新古典派経済学とは反対の立場にあることを注意しておきたい。この見方によって、最も多くの、たとえ経済学の素養が無い学生でも、どの経済システムでも中心的な問題であるとわかる失業という概念の範囲内でそれぞれの思想が活発に議論するようになることを提案したい。これは新しい領域であることを心にとめておこう。そしてしかも、社会学者は狭隘な関心を超えて広げようとするのは当然にいやがるものであり、社会学者にはその狭い関心こそがもっとも居心地の良いものであることも心にとめておこう。（提案：2単位）。

基本ユニット3：経済のモデル化：経済の動態と反応と制度的な動態そして正しい数学を使って経済の単純な動態モデルどのように展開するべきかを理解する。このシステムはどのように動いているのか？制度はどのように個人の行動に影響し、逆に個人はどのように制度に影響するか？（提案：2単位）

基本ユニット4：金融、信用、貨幣を理解する。信用はどのように確立し、市場経済におけるその役割はなにか。債務の役割を理解し、貨幣とは何かを理解する。貨幣の内生的な性質。資本主義における金融の役割は何か？（提案：3単位）

基本ユニット5：コミュニケーション。経済学課程の卒業生は、コミュニケーションの技術がお粗末なことで悪名が高い。おそらくこの課程（コミュニケーション）は、ジャーナリストによって教えることができる。私達は、現代の諸問題をどのように理解し、それらについて他者とどのように交流できるのか？

6.3 3年目：貧困に焦点を当てる

6.3.1 5つの基本ユニット

基本ユニット1：権力。権力とは何か、そしてそれはどのように使われるのか。植民地主義、新植民地主義、開発、未開（提案：2単位）

基本ユニット2：貧困。定義、計測、概念、貧困の解決（提案：2単位）

基本ユニット3：企業と産業構造の展開。異端派マクロ経済学に重点を置く、特に企業を理解するためにポスト・ケインジアン、スラッファ学派、進化経済学と統合させながら強調する（提案：4単位）。

基本ユニット4：貿易とグローバル機関（提案：2単位）

基本ユニット5：あらゆるレベルでの政府の役割（提案：2単位）

6.4 4年目：環境の持続可能性と地球温暖化に焦点を当てる

6.4.1 5つの基本ユニット

基本ユニット1：持続可能性とは何か？ それは何を意味し、どのように実現するのか？（提案：2単位）

基本ユニット2：成長とは何か。成長は持続可能であるのか？ 私達は成長をどのように計り、概念化するのか？（提案：2単位）

基本ユニット3：資源とは何か。環境とは何か？ 外部性／公共財に焦点を当てる（提案：2単位）

基本ユニット4：経済学は、気候変動と地球温暖化を理解するためにどのように使われるのか？（提案：2単位）

基本ユニット5：現状の問題を解決するために多元主義的な内容の中で現状の思想が使われる最終学年の課程（提案：5単位）

6.5 2年、3年、4年次に向けての重要点

6.5.1 2年次の重要点

歴史や人類学、社会学とのチーム・ティーチング。4年間使われる様々な思想すべてが紹介されなければならない。どのように経済システムが機能しているか、学生たちの理解が促されるように、多元主義的な内容のなかで使用されるさまざまな思想が講義されなければならない。学生は、すべてのユニットの中で初期の経済学者が行ってきた知的貢献に触れるべきであろう。それは、学生たちが経済史と経済思想史の両方の学習を相当量受けるべきであるということである。重要なことは、関係するすべての教科課程と教員との必要な調整に重点が置かれることである。その場限りですることなど、言い換えれば、広範な総合的目標を考慮せずに行うべきことなど、4年間通じて何もない。総合的な目標が絶えず勝っており、関心を持つ利害関係者は継続的な話し合いを続けなければならない。

6.5.2 3年次と4年次の重要点

多様な教科課程とその教科を教えると予定されることを期待される多様な教員とが所与とされるのであれば、基本ユニットといくつかのテーマに沿った学年進行とを統合することが重要である。

- *人為的で間違った、マクロとミクロとの間の分割を削除する
- *思想史の豊かさを蘇生し、重要視する。歴史は、学ぶべき多くの教訓を提供している (Dow, 2009)。
- *他の学体系に対してなにが切れ目無く関係しているのか私たちにはわからないということ
を謙虚に考えに入れることで、隅々まで多元主義を強調する。多元主義におけるあらゆる
努力をも排除してきたのは、経済学と経済学者の傲慢である。
- *ほとんどの新古典派経済学者によって理解されてきた思想の代案がごく少ないことを前提
にすると、学生による学習や、サービ斯拉ーニング、課題発見型の学習のような代案とし
て提案されている教授法と共にチーム・ティーチングは重要である。
- *経済の動的な性質と、どのように動的な単位ユニットを構築できるかとを重視するべ
き。構築されているさまざまなモデルを結びつけ／統合する最良の方法は何か？

もし刺激的な教員がこのような基本ユニットを教えることができないのであれば、その場合はおそらく、いくつかの教科課程はそれができる人を一おそく極めて限られた基礎の上という限定あっても一はずしてつくられるだろう。というのも、そうすることが非常に論議を呼び起こすことができるのだからである。

議論を呼び、それが新たな論議を呼び起こす問題を議論する、だがそれは、議論に値することである。例えば、いつ多元主義がカリキュラムの中に導入されるべきか？ 早い段階でか、それとも、基礎が終わった直後に初めてしっかりと固められるものなのか？ もし、後者であれば、その基礎は何であり、誰がそれを決めるのか？ もし、私たちが新古典派経済学の良き基礎が確立するまで待っていたら、そうすると、不幸なことだが、いかなる代案を提案することにも反対するという本能的な反応が起こるであろう。

「(ある信念を受け入れたか、そのことが彼を喜ばせたのかのいずれかのために) 人間 (原文のまま) の理解が何かにいったん固定されると、さらに、それを支持し、同意するように、それ以外のすべてのことを引き寄せるのである。そして、もし、もっと広範な数のより強力な対抗事例に出くわすと、それらに気づかないようにするか、無視するか、最初の概念の権威を守るために、それらを、そしてそのすべてをかなり危険な偏見を持って退け、拒否するような微妙な区別を行う。」 (Bacon, 2000 [1620], Book, XLVI: 42)。

こうした抵抗性というのは、新古典派系経済学が、経済学および経済的アプローチの覇権的な優位性と共に、故意に一元主義を教え込もうとしていることによって強化されていく。

こうした論争を呼ぶ最終的な問題は、たとえ少しでも新古典派経済学を教えるべきか、あるいは、もし教えるとしてもどの程度の量を、どんな特徴の教科課程で教えるべきであるのかということである。ほとんどの多元主義者は、多元主義の精神の中では、古典派経済学は少なくとも共通語ではないけれども、新古典派経済学を教えるべきであり、新古典派経済学の無数の批判を理解するためには、新古典派経済学を理解する必要があることに同意する。私は謹んで次のことには同意したい。他のどの社会科学 (あるいは科学) が、失敗した時代遅れの事項を教え続けているのだろうか？ そして、この失敗した考え方が問題の部分なのである。

「賢明な経済的学問とはほど遠い、新古典派経済学は、実際にどのように経済が動いており—そして、なぜ、周期的に、厳しい崩壊をするのか—を理解するのに最も大きな障害に現実

になっている。もし私たちがこれまで、生き活きと経済を叙述し、経済を運営するのを唯々助けてくれる経済理論を持つことができているならば、新古典派経済学は放棄されるはずである」(Keen, 2011: 15)。

もし私たちが我が世代の問題の解決を促さなければならないのであれば、学生たちに教育をしなければならない—そして変節させてはならない—、だから、なぜ私たちは問題の部分のなにを教えなければならないのか？ 学体系は移行しなければならないし、確かにもはや役に立たないものは捨てさるなければならない。すなわち、学生は現実を理解する方法として新古典派モデルを学習しなければならない、しかしそれは、新古典派経済学が現在行っているようなすべての教科課程やすべてのテキストの焦点になるべきではない。

7. 多元主義への評価への覚書

多元主義への評価は急を要しないと仮定できるかもしれない。その一方で、いくつかの理由から、実行する前に多元主義への評価をしておいてもらおうという助言も存在する。その理由の一つ目は、特定の評価が明らかに総合的な目標と多元主義の目的とを確立することになり、それによって多元主義の構造が評価を受けることができるからである。私たちの初期の議論に基づけば、重要なことは、何を、どのように評価するかを多元主義の目的に正しくあわせることである。多元主義を実行する目的は、明らかに、第一段階の間に明瞭にされなければならないし、次に、注意深く考え抜かれ、第二段階で実行されなければならない。システムを機能させ、効果的に反応させるという二つのくさびである両方の段階とも、注意深く調整されなければならない。

議論すべき追加的な点：あらゆる多元主義の教科課程のあらゆる教授に多元主義者であること求めるべきか？ あるいはすべての学科にそれをもとめるべきか？ もし前者であるならば、評価は適宜、工夫されなければならない。個々の教員に従って異なる結果を持つ個々の教科課程。もし後者であれば、個々の教科は、評価の点で問題にならない。しかし、それらがどのように全体に統合されるのかだけが問題である。このように多元主義を教える学科の適切性への評価は、個人の適格性よりもむしろ焦点になる。学科は多元主義を教える的確な仕事をしているのか？

多元主義の内部での文献評価は、調査の必要がある。私は、多元主義者が、多元主義に報い、それを励ますような評価過程を展開し、概念化するように多元主義者に勧めたい。それはまた、評価の結果が、期待とは合致しないものであるかもしれない。たとえば、いわば輪を閉じるために、最初の目的—それはもちろん評価の目的だが—を再びやり直すように求めていくことでもある。この過程はいくつかの反復を求めることかもしれない、しかし、その合間には、基礎にある条件は、同様に変化するかもしれない、だから評価過程の構築では柔軟性が求められる。

多元主義は、他の見方を理解することを尊重することであり、多元主義を教える目的の一つは、私たちの学生が最終的に相互理解と開放性という文脈の中で他の社会学者と研究をすることである。だから、いかなる評価も、代替案の見方を率先して理解し構成化し、そしてそれが実際にできることに焦点を当てるべきである。多元主義を教えることを成功させる要因は、カリキュラムの中ですべての見方を教えるのではなくて、相違あるものへの尊重を教え、他者から進んで学

び、協調することを教えることである。したがって、多元主義を実行することは、どのように他者に寄り添っていくべきかにかかわる態度や見方—大学の目的と一致しない態度だけでも—を教えることである。言うは易い行は難し！

しかしこれは、新古典派思想に支配された現在の評価とは全く異なった多元主義の枠組みの中での評価にますます焦点を当てて示唆している (Lee, 2009)。そして、試行的な手続きが与えられれば、多元主義の教科課程で学ぶ学生たちは、多元主義ではない学生たちよりも低い成績にしかならない傾向になるかもしれない。というのも、前者は欠点のある論理や薄弱な演繹に疑問を投げかける能力があるからである。フレッド・リーが主張しているように、もし異端派経済学が成功できるならば、(その成功によって彼は新古典派経済学と同等の立場に立つと呼ぶ) その時、評価過程の改革が重要になるだろう。

「しかし、実際にやらなければならないことは、おそらく自らの研究評価方法の開発やジャーナルや学科のランキングを通して、異端派経済学(が)研究評価実習、分野別ベンチマーク・ステートメント、ジャーナルや学科の主流派ランキングに挑戦しなければならないことである」(Lee, 2009: 206)。

わたしは、リーの主張に同意し、多元主義が広がることを望んでいる—だが、評価手続きを支配している新古典派内部では成功できない。だから、多元主義が学科レベルで成功するために、私たち(あるいは少なくとも私たちのある人たちは)、フレッド・リーが主張するように、評価手続きを変えるために一生懸命研究をするべきである。

ベーコンの以下の洞察は、どのように多元主義を評価するかを決める場合には適切である。「私たちが知る必要のあるできるだけ多くのことを知ることは、良いことだ。しかし、すべてのことを知ろうと考えるよりもすべてのことを知らないということを思ってみよ、そして、私たちが知る必要があることは何もないことを知ろうではないか」(Bacon, 1620 [2000], CXXXI: 97)。これに加えて、無知なることを、私たちが知らないことを認識する謙虚さを、他の社会学者とともに研究することを進んで行う謙虚さを喜んで受け入れよう、そうすれば、私たちは、多元主義の概念化と実行と評価に成功する処方箋を手に入れるのである。

8. 実行への批判と欠点

多元主義に反対する既存の利害の外からの、わかりやすい批判には次のようなものがある。もし私たちが、学生たちに多元主義を教えなければならないとしたら、その場合、誰が教員たちに多元主義を教えるのだろうか？ ほとんどの教員が多元主義に触れてきていないのに、いったいどの教授に多元主義を取り上げてほしいと頼むことができるのか。これは深刻な問題だが、それは多元主義が長期にわたって実行されてはじめて成功することを示している。

第二の問題は、多元主義を実行する資源を獲得し続けるという問題である。資源とは、訓練し、研究会を行い、場合によっては、新たな教員を雇わなければならないということである。至る所で行われている財政カットの時代のなかで、なんらかの追加資金を獲得することは困難であるかもしれない。しかしそれでも、それができなければ現状に満足するだけであろう。

第三の批判は、必ずしも欠点とは言えないが、摩擦や意見の潜在的な不一致は、多元主義を実行する処方箋がひとつも存在しないのではないかと、いうものである。多元主義者は、多元主義を構成化し実行するときこそ多元的であらねばならないのだ。言うは易く行う難し！

9 結 論

多元主義は、それが実行される時、潜在的欠点や不利がある。けれども、どんな代替案よりもずっと良いものであり、本気の企画として価値がある。

「多元主義は、共感と対話と慈悲と理解を注ぎ込む。(反対に)一元論は、異なる見方を濾過して取り除くことで、ある状況でどの見方がより良いものかを知ることができなくなる。一元論は、多元主義とは対照的であり、教育とは正反対にある。一元論は、教育というよりもむしろ、変節を迫るものであり…多元主義によって学生たちは選択ができるようになるが—一元論では抑圧され、選択できなくなる」(Reardon, 2009b: 267)。

多元主義は、我が世代の問題を解決する秘策を提供するさまざまな思想の寄せ集めであり、グラエバーが記しているように、「私たちが信頼できることは、歴史は終わらないということであり、新たな考えへの驚きは確かに出現するということである」(2011: 384)。私たちは新たな考え方を必要としている。しかし、それは科学革命の夜明けにベーコンによって求められた機能的な考えとは限らない。私たちは、これまでのさまざまな思想および社会科学、諸科学とを寄せ集めたあらたな考え方を必要としている。私たちは、伝統的な学体系を超えていく全体論的多元主義を必要としている。どんな新しい考え方も、多元主義という脈絡の中で現れ、繁栄する。

ミンスキーも記しているように、「大学や大学院で教えられる経済理論—過去30年以上にわたる経済学の学生やその実践者の道具であり、資本主義支配者たちの経済政策の知的基礎である—は、重大な傷を負っている」(Minsky, 2008: 4)。同じ単元を教え続けることよりもむしろ、それ以上に同じことを無視しながら、新たなカリキュラムを考案し、実行しなければならない—それは望むべき新世界秩序であり、多元主義の総合的な目標と一致するものである。

この章で、私は多元主義を実行するためのやり方を提供しようと試みた。口実にもこれが唯一効果的な方法だとは言っていない；全く効率的ではない！ 私たちは、多元主義に関心を持つすべての人からのグローバルな対話を必要としているのだ。

注

- 1) この本は経済学の一つのテーマ—ミクロ経済学—に唯一挑んでいる。その一方で、ヒルズとマイアットが記述した不快感や断絶とは、不幸なことに経済学体系内のあらゆる部門(テーマ)に影響を与えている。もっと多くのこのような本が書かれることを期待しよう。
- 2) マーシャルは新古典派総合に対して最も責任が果たせる人である。それでも、彼は、新古典派経済学の他の創設の父たちと一緒に、「彼らが考えた思考方法は移り変わることがわかって、驚いた」かもしれない。(しかし)「そうではなくて、人が経済学を行い、敬意を与えられる唯一の方法として(マーシャルは)硬直化するようになった」(Keen, 2011: 35)。マーシャルの研究の継続的なテーマは、次のことを熱心に勧めることにあった。すなわち、「一般経済原理を事実問題の解決へと関係す

- るように導く唯一の道としての地域環境の研究は、経済原理それ自体が内在的に柔軟な公式を与えられ、発展的な道具として認められることを前提としている。それによって、人間社会は、内生的な要因あるいは外生的な要因からもたらされる変化のいずれかをどのように取り扱うべきかを学ぶ。驚くに当たらないことだが、「マーシャルの経済思想のいくつかは、間接的に、そしてほとんど水面下で、政治学や都市計画、社会学、人口統計学、地域研究などに拡散している」(Raffaelli 他, 2010: xi)。
- 3) このチラシは、1970年1月にロンドンで開かれた研究大会につながる。この大会は英国の異端派経済学を発展させる重要な機関である社会経済学研究大会と、1976年に *Capital and Class* (『資本と階級』) へと移行した Bulletin of the Conference of Social Economists (社会経済学大会年報) とへ展開した」(Lee, 2009: 127-130)。
 - 4) 「我が流派の士」という差別的な言葉は新古典派教科書の随所に見られる叙述にふさわしいものである。そのテキストの目標は、学生に経済学者のように一私達すべてがまるで同じように考えるように一考えることを教え込むことである。この抑制的で、順応者のようなニュアンスは、虚心坦懐な人の背筋に戦慄を呼び起こす。我々の目標は、学生たちを教育し、彼等に歴史、社会学、心理学などを理解させることではないのか？ そして、我々の世代の多くの問題を扱う他の社会学者と一緒に研究できるようにすることではないのか？ どおりで、新古典派経済学者は権力や制度の歴史的展開を理解できていない。
 - 5) 多元主義の歴史的発展の入門のためにぜひ見ていただきたい (Negru, 2009: 2010)。IJPEE の目的は経済学教育の再構想化と再構築であり、経済学における、そしてとりわけ社会科学の中の多くの体系の間の好奇心豊かな協調を育て、励ますことである。
 - 6) コイルですら、経済学の開拓者たちが達成してきた進歩に大喜びした後に、現実と教授法との乖離を認め、「私は、主流派経済学批判が、私たち経済学者が説教していることを教えるようになって初めて、意味を持つようになることを受け入れる」(Coyle, 2007: 250)。しかし悲しいかな、経済学者への彼女の厳しい要求を心にとめなければならない！
 - 7) 有益な論文については、『多元主義と経済教育の国際学術誌』(*The International Journal of Pluralism and Economics Education*) の多くの号を参照されたい。
 - 8) かなり多くの事例あるその一方で、油断ならない無知についてある事例が特に私の胸に刺さった。「経済学者はしばしば、神の見えざる手によって市場が動いている、と主張することによって市場の動きを擬人化する。それでは質問：白熱電球を変えるのに、どのくらい多くの経済学者が必要か？ 答えは：一人もいない。市場がそうするからである」(Froeb and McCann, 2010: 99)。もちろん、市場を構成するものは何か、だれが白熱電球を作り、意思決定者と実際に電球を導入した労働者との間の力関係をだれが作るのか、そしてその他の無数の質問にたいする無知が、回答の無いまま残されている。

参考文献

- Bacon, F. (1620 [2000]) *The New Organon*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. (『ノヴァム・オルガヌム—新機関』ベーコン著、桂寿一訳 岩波文庫, 1978年)
- Bowles, S., Edwards, M. and Roosevelt, F. (2005) *Understanding Capitalism: Competition, Command and Change*, Oxford University Press: New York.
- Bruce, S. (2008) *Fundamentalism*, Cambridge, UK: Polity Press, 2nd ed.
- Coyle, D. (2007) *The Soulful Science—What Economists Really Do and Why it Matters*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- DeMartino, G. (2010) *The Economist's Oath—On the Need for and Content of Professional Economic Ethics*, Oxford, UK: Oxford University Press.
- Dickens, C. (1859 [2000]) *A Tale of Two Cities*, New York: Penguin. (『二都物語』(新潮文庫) 文庫

- チャールズ・ディケンズ著, 加賀山卓朗訳, 2014年)
- Dow, S. C. (2009) 'History of Thought, Methodology and Pluralism', In: Reardon, J. (ed.), *The Handbook of Pluralist Economics Education*, London: Routledge, pp.43-53.
- Dowd, D. (2004) *Capitalism and its Economics—A Critical History*, London: Pluto.
- Froeb, L. and McCann, B. (2010) *Managerial Economics—A Problem Solving Approach*, Mason, Ohio: Cengage Learning, 2nd ed.
- Fullbrook, E. (2009) 'The Meltdown and Economics Textbooks', In: Reardon, J. (ed). *The Handbook of Pluralist Economics Education*, London: Routledge, pp.17-23.
- Fullbrook, E. (2010) 'How to Bring Economics into the 3rd millennium by 2020', Real-world economics review, 54, 27: 89-102, September, <http://ywww.paecon.net/PAEReview/issue54/Kessler54.pdf>
- Goethe, J (1774 [1989]) *The Sorrows of Young Werther*, London: Penguin. (『若きウェルテルの悩み』ゲーテ著)
- Graeber, D. (2011) 'Debt-The First 5000 Years', New York: Melville House.
- Hill, R. and Myatt, T. (2010) *The Economics Anti-Textbook-A Critical Thinker's Guide to Microeconomics*. London: Zed Books.
- Hodgson, G. (1999) *Evolution and Institutions-On Evolutionary Economics and the Evolution of Economics*. Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Johnson, S. (1759 [1976]) *The History of Rasselas, Prince of Abissina*. New York: Penguin.
- Keen, S. (2011) *Debunking Economics-The Naked Emperor Dethroned ?* London: Zed Books. 2nd ed.
- Keynes, J. M. (1936) *The General Theory of Employment Interest and Money*, New York, Harcourt: Brace and Company. (『雇用・利子および貨幣の一般理論』ケインズ著)
- Lee, F. (2009) *A History of Heterodox Economics-Challenging the Mainstream in the Twentieth Century*, London: Routledge.
- Leech, G. (2012) *Capitalism, A Structural Genocide*. London: Zed Books.
- MacMillan, M. (2009) *Dangerous Games-The Uses and Abuses of History*. New York: Modern Library.
- Magnuson, J. (2012) 'Economists and Education in A World without Oil' *Interconnections*, issue 8: 7-15.
- Mankiw, N. G. (2009) 'That Freshman Course Won't Be the Same', *New York Times*, <http://www.nytimes.com/2009/05/24/business/economy/24view.html>. May 24, Accessed May 24, 2009.
- Marshall, A. (1920 [1946]) *Principles of Economics*. London: MacMillan.
- Minsky, H. (2008) *Stabilizing an Unstable Economy*, New York: McGraw Hill. (『金融不安定性の経済学：歴史・理論・政策』ミンスキー著, 吉野紀 [他] 訳, 多賀出版, 1989年)
- Negru, I. (2009) 'Reflections on Pluralism in Economics' *International Journal of Pluralism and Economics Education*, I, 1.2: 7-21.
- Negru, I. (2010) 'Plurality to Pluralism in Economics Pedagogy: the Role of Critical Thinking', *International Journal of Pluralism and Economics Education*, I, 3: 185-193.
- Otsch, W and Kapeller, J. (2010) 'Perpetuating the Failure: Economic Education and the Current Crisis', *Journal of Social Science Education*, 9, 2: 16-25.
- Polkinghome, J. (2002) *Quantum Theory-A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Raffaelli, T.; Becattini, G.; Caldari, K. and Dardi, M. (2010) 'Introduction" In: Raffaelli, T.; Becattini, G.; Caldari, K. and Dardi, M. (eds.) *The Impact of Alfred Marshall's Ideas-The Global Diffusion of His Work*. Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Reardon, J. (2004) 'Suggestions to Effectuate a Multi-paradigmatic Approach to the Teaching of Principles of Economics', *Journal of Economic Issues*, 38 (September): 839-841.
- Reardon, J. (2009) 'Conclusion' In: Reardon, Jack (ed.) *The Handbook of Pluralist Economics Education*, London: Routledge, pp.267-268.

- Reardon, J. (2010) 'Foreword', *International Journal of Pluralism and Economics Education*, I, 3: 179-184.
- Robinson, J. (1980) *What are the Questions and Other Essays*. Armonk, New York: M. E. Sharpe.
- Schumacher, E. F. (1973 [1989]) *Small is Beautiful-Economics as if People Mattered* New York: Harper Perennial. (『スモール イズ ビューティフル』講談社学術文庫, 小島慶三・酒井懋共訳, 1986年)
- Seigfried, J. (2009) 'Really Thinking Like and Economist', In: Colander, D. and McGoldrick, K. M. (eds.) *Educating Economists-The Teagle Discussion on Reevaluating the Undergraduate Economics Major*, Cheltenham, UK: Edward Elgar, pp.215-224.
- Sen, A. (2005) *The Argumentative Indian-Writings on Indian Culture, History and Identity*. London: Penguin.
- Sen, A. (2010) *The Idea of Justice*. London: Penguin. (『正義のアイデア』アマルティア・セン著, 池本幸生訳, 明石書店, 2011年。)
- Söderbaum, P. (2008) *Understanding Sustainability in Economics-Towards Pluralism in Economics*, London: Earthscan.
- Söderbaum, P. and Brown, J. (2011) 'Pluralism and democracy in political economics', *Int. J. Pluralism and Economics Education*, 2, 3: 240-243.
- The Economist (2012) 'The Higgs-boson. Gotcha!', July 7th, pp.67-68.
- van Staveren, I. (2011) 'Mind and matter: developing pluralist development economics', *Int. J. Pluralism and Economics Education*, 2, 2: 120-144.
- Zola, E. (2007) *The Belly of Paris*, Oxford, UK: Oxford University Press.